

人はち、
地図を持たない僕らは おんなじ世界の中で
道なき道を行くしかない 無知な旅人

この場所で足踏みをして 一步を躊躇うのは
変わらないことを笑うくせに 変わることを恐れてる
そんな

振り向けば

君の過去は 確かにそこに在って
足元を見降ろせば そこには今の君が在るけど
顔を上げた君の視線の先に広がるのは
期待と不安の入り混じる のり

誰かと比べ

そんなことに何の意味があるのだろう
それぞれがそれぞれの道を歩むこの世界で

もし君が 今に自信を持てず 迷うのなら
5年先 なりたい自分を 思い描いてみて
今するべきことが 見えてきたその時に
次の一步を きっと踏み出せるだっ

ひとつだけ確かなことがある

君が一步踏み出した先が 君の道になる

「バック・トゥ・ザ・フューチャー」

21生 久住 忠彦

この号を作成するため、後期は「飛翔」編集室に一人でこもることがよくあった。誰も見ていないとなると、手を抜くのが悪い癖で、編集室でも真面目にパソコンに向かうこともあれば、携帯をいじったり、編集室にあった少 た た た も多かった。

その流れ の の
る。几帳面にファイリングされているそれらを開いてみたとき、
思ったのが、企画の面白さである。どれもこれも、学生目 の であ
り、様々な工夫 り、
ろであり そ

10年以上前のオリキヤンのレポートがあったり、写真の の
装から、そして「飛翔」本文に使われている今より若干薄くペラペラな
紙からも、時代を感じてしまう。

昔の編集委員は今より少し多かったんだと知った。アメリカへ行った
旅行記や、いじめに関しての座談会など、今とは少し趣向が違っている。
そして、日本社会とも関係あるだろうが、学生が明るく、創造的エネル
ギーに満ちているように、記事の背景から感じた。

昔は頑張っ う っ
をつくりたい、という思いがでてきた。自分で考えて、そしてみんなの
意見を出し合って、色々な個性が溶け合った、総科らしい「飛翔」をこ
れから作っていききたいと思う。

今回紹介す

25

出身の私からすれば、雪がふるゝみぞれがふる、であった。通学路では靴も濡れ、雪遊びはおろか雪合戦すらできず、更には洗濯物も干せない。単なる寒さの象

な さ

重く澱（よど）んだ空から落ちてくる みぞれ
白くすきとおる冷たさは

〈自分とは何かと考えていた、雪の降り積もったとある朝。〉

降っても降っても
決してつものことのない
たどりつけない想いに こみあげる涙のように
それでも落ちてくるあめゆき

きながら、悶々と毎日を過ごしていた。〉

わたしはいつたい何者なのだ――

答えるものがない闇の中で 一心にさがしつづけ
狂わんばか

〈自分が誰なのか、いつたい何のためにこんな生活を送っているのか。いくら考えても答えは出ず、もうなにかも投げ捨ててしまいたい、この中から逃げ出したい、そう思う時もあった。〉

けれどいつしか夜が明けて
みぞれは雪に変っていた
確かにそこにつもっていた
大地と同じ広がり
ほんとうの白さで輝きながら

〈しかし、たとえ今の自分が嫌いでも、それ
分。それは れ 害 づ 。 、 、 分は 、 、 分
とは違うのだ。だから、今日の自分
う。 。

そんなことを思いながら、臨時休
、 と を
いた。

今年一番の積雪。
広がった銀世界。

心が一気に洗われた朝だった。

20 生 吉田 聡

ときに改札機や 機に

了する。実に便利なシステムだ。ちなみに、全国で最初にこのようなカードを導入したのは、東京でも大阪でもない、広島の「スカイレールサービス」なのだ。雑学程度に覚えていると、この先どこかで役に立つことが……普通に生活している分には、ないと思う(笑)。

さて、前回の号の特集記事中でも触れたが、
「テツ」である。バスファンでもある。ならば、I C O C AやP A S P Yは当然持っているはずだと思いのことだろう。ところが、実はこれらのカードは持っていない(正確には、「I C O C A」を持ってはいないが、使っていない)。なぜか。それは、「使い終わった切符」を集める趣味があるから!!

使い終わった切符は、改札口で申告すれば記念に持ち帰らせてもらえる。また、バスカ ば
かおもしろい。しかし、I C O C Aを持ってしまうと、切符を買う必要がなくなるので、使い終わった切符を記念に残すことなんてできない。P A S P Yを持ってしまうと、必然的にバスカードを買わないことにな

あ A A

ている。本当は昨年10月いっぱいバスカードの販売が終了するはずだったが、幸か不幸か(?) P A S P Yの品薄状態が続いているとのことで、バスカードの販売は現在(1月)も続いている。しかし、次回の号が発行される頃には、きっとバスカードの販売が終了し、僕の財布にもP A S P Yが入っていることだろ こ が 流

い。そもそも、
は「P A S P Y」とも「O O P Y」つながりで積極的に仲良くしていくべきなのだろう(笑)。

結局のところ、僕は使い終わった切符やバスカードを手元に残すためにI C O C A A

りのときに改札 りに の
が完了する」というシステムそのものを嫌っているのではない。むしろ、こういったシステムを利用することに憧れている。とりあえず今はそれよりも使い終わった切符やバスカードを手元に残すことを優先しているわけだが、本当は「ピッ!!」と財布をタッチして運賃を支払いたくてたまらな な

はものすごく嬉しかった。ご存知の方もあろうかと思うが、生協の組合員証の機能も学生証に載り、生協での支払いは学生証を入れた財布を読み取り機にタッチすれ す

そんなわけで、新しい学生証で初めて生協での支払いを行っ、
どれだけ晴れがましい気分であっ いが
楽しくてたまらない。だからきつと、近い将来P A S P Yを使い始めた暁には、そのとたん、どうしても早くP A S P Yを買わなかったのだらうと後悔するのだろう。何とも身勝手なことである。

【後日談】「生協での支払いは学生証を入れた財布を読み取り機にタッチすれば完了する。」と書いたが、ある日生協のレジで「カードの磁気が弱いので、できれば財布越しではなく直接タッチしてもらえないか」と言われてしまった。僕の認識が誤りでした。皆さん、真似をされないようにお願いします。

「ニックネームの功罪」

19生 中村 洋平

講義中、メールの本文、余暇時間。いろんな時に、いろんな所で、いろんな人に呼ばれる「がり」というニックネームを私が拝命したのは、大学1年の春。正確には小学校6年生の頃について、味というのは……という話せば長い話は、今はどうでもいいので割愛します。

入学して3年。ニックネームで気軽に呼び合えるお仲間、仲のいい友達も出来ました。その一方でオリキャンで同じ班だったのにすっかり縁の切れてしまったような人もいます。そんなみんなが、「がり」と私のことを呼んでいるのです。別にそのニックネームが嫌いなわけじゃありません。でも、いつまでも「がり」じゃ、いられないんです

私も遠くない将来、社会人になります。せめてその時、一緒に卒業しなければいけないのです。きっと。そうしたら、い

しょう。彼の、彼女の名前は知ってます。でも、呼んだことがない。ニックネームと一緒に友人にもサヨナラを言わないといけないなんて、そんな道理はありません。でも、今、そんな分岐うな気がします。

サークルや、バイトでは名前前で呼びあっています。友人であり、同時に仲間であるのです。私は、20年くらい生きたところで、初めて人を「名前」で呼びました。記念すべき第1号の彼はサークルの同輩でした。

いままでの

いつて今まで
てい
い
い
い

決して他の信頼していないとかそういうわけじゃないのです。

ておきたいと思うのです。そ
の
う。そ
がしています。

「思い出したこと」

20生 山崎 弦太

飛翔な日々のバックナンバーにあだ名をテーマにしたものがあつたのを見て、僕はふと思い出しました。それは小学校1年生の春の下校途中のことで、僕たちはそれぞれのあだ名を決めていたのです。誰かが僕に「やまさきだか」「やつち」だね」と言いました。それから、みんなは「僕はたかひろだから」「たつち」だとか、「あつろうだから」「あつち」だとか、「かつち」だとか「みつち」だとか口々に言うのでした。その時、たきおかさとし君が、「たきおかだから」「たつち」だ」と言いました。でも「たつち」はもうほかの人のあだ名、それを指摘しました。「たきおか君はどう」か。としか「さつち」にするのかな」と僕は様子を見ていたのですが、その時たきおか君は言ったのです。「僕はたきおかだから、たつき」ね。」それから、たきおか君とは高